



Title	形成期のグロムイコ, 1909-1945
Author(s)	横手, 慎二; Yokote, Shinji
Citation	スラヴ研究, 36, 47-78
Issue Date	1989
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5179
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113298.pdf



形成期のグロムイコ 1909—1945

横手 慎 二

- 1 課題設定
 - 2 外務人民委員部に入るまで
 - a 生い立ちと抜擢
 - b 知的形成
 - 3 入部から訪米へ
 - a 1939年の外務人民委員部
 - b 実務的な外交官
 - c アメリカ専門家
 - 4 戦中から戦後へ
 - a 大国の駐米大使
 - b 国連の創設者
- 結びにかえて

1 課題設定

グロムイコが外務大臣の職を去って3年あまりたったが、外交政策において彼がどのような役割をはたしていたのかという問題は、その後のソ連外交の評価とかかわりあって、ますます切実なものとなっている。1985年11月に開かれたロシア史研究会の大会において、私は「外相グロムイコの28年」と題する報告を行ない、彼の発言を他の指導者のそれと比較することによって、次のごとき解釈を示した。

第一に、彼の外交姿勢を考えると何よりも重要なのは、世界の重要な問題でソ連を抜きにして解決できるものは一つもない、というキャッチフレーズである。この公式は公表されたグロムイコの発言によるかぎり1970年のレーニン生誕記念日の演説において最初に見られ¹⁾、以後機会あるたびに繰り返されることになる²⁾のであるが、既に60年代から同趣旨の発言はなされていた³⁾。

第二に、60年代半ばには、彼はグローバリズム（全世界介入主義）の裏返しとみなし得る孤立主義批判を、国内向けに語りはじめており⁴⁾、ほぼこの時期からグロムイコの地位は、主として政策を遂行することを職務とする者から、よりおおく政策を立案・提言する者へと変化していたとみられる⁵⁾。これはデタントの構築が始まった時期と対応しており、70年代末からのデタントの崩壊期にグロムイコの本領が現われたとする R. スター等の説⁶⁾と矛盾している。

第三に、従って、彼がうち出したスローガンに集約される世界強国としての地位の主張は、同時に、デタントの構築に示されるごとき米ソ共同支配を是とする傾向をも含むものであったと考えられる。70年代のソ連外交には、グロムイコのかかる方向とは別に、グレチコをはじめとする軍部の第三世界に対する軍事的支援をソ連の「使命」とみる⁷⁾方向と、「世界の反動の中心であるアメリカ帝国主義」⁸⁾を一貫して糾弾し、民族解放運動に対する支援を主張し続けていたスースロフの方向があった。後二者の方向は同様の積極的国際主義を標榜しつつも、各々の論理によって、米ソ共同支配を是とする傾向をもつグロムイコの外交とは異なる側面をもっていたと考えられる。ブレジネフはこれらの意向を調整しつつ、80年代初頭まで外交をおこなっていたものと思われる。

本稿は以上の仮説をひとまず既知とした上で、かかるグロムイコの外交姿勢がどのように形成されていったのか、特に、彼が外交官として活動を始めた第二次大戦期に注目して検討しようとするものである。まず2でグロムイコが外務人民委員部に入るまでの経歴を取り上げ、3と4で外交官時代の彼の活動をおうことにする。

2 外務人民委員部に入るまで¹⁾

a 生い立ちと抜擢 アンドレイ・アンドレーヴィッチ・グロムイコは1909年7月18日に、ベロロシアのゴメリにほど近い農村、スターリー・グロムイキに生まれた。グロムイコはこれまで公式的にはロシア人とされてきた²⁾が、この出生地からみて、ベロロシア人である可能性は高いといえよう。あるいは既に彼の両親の時から、ロシア語が母語になっていてロシア人と称しているのかもしれない。生家は、彼自身の言葉を使えば「自己と家族を養うに足る十分な土地を持たない」貧農であった³⁾。1914年の時点で一家には長男の彼と妹のエヴドキヤの二人の子供しかいなかった⁴⁾が、しかし生計を立てるためには、森から切りだした木をゴメリに運んで家計の不足を補わねばならなかった⁵⁾。

8歳で迎えた革命は、こうした一家にとって当然ながら歓迎されるべきものであった。回想の中で彼は、17年の夏の日に見た光景を描いている。着飾った地主一家は4輪馬車でどこかに去ろうとしていた。裸足の自分たちは彼らのあとを群れをなして歩いていた。そして大人たちは、地主一家の姿を密かに遠慮気に目で追っていた。100デシャチーナの地主の土地は、それよりだいぶ前に自分たちで分配していたのである⁶⁾。

回想録ではグロムイコはかすかに仄めかしているにすぎないが、17年の革命で一家が得た物質的な利益はその後の戦時共産主義期に損なわれることがあったかもしれない⁷⁾。しかし、革命は若者にこれまで想像もできなかった人生の可能性を開いていた。どこからともなく、勉強のよくできる者にはコムソモールに入り、広く学問を受ける道が開かれるという噂が流れた。噂だけでなく、実際に村でコムソモール細胞の組織が始まった。グロムイコは躊躇することなく入り、積極的に活動していった⁸⁾。

彼らが組織した読書会や集会では、当然ながらお互いにマルクス主義と世界革命の勝利が不可避であると確認しあっていた⁹⁾。少年期から始まったこうした学習は、その数年前まで子供同士でスヴォーロフやポチョムキン等のロシアの英雄に扮して遊んだ経験¹⁰⁾と

無理なく接続したようである。国際主義を標榜する革命は、この時期都市にコスモポリタンの文化を生み出していたが、しかし彼の育ったベロロシアの農村までは届いていなかったものと思われる。むしろ、第一次大戦中にドイツ軍によってこの地域全体が占領された経験は、少年時から革命を守ることと国を守ることが同じであると彼に教えていたのである¹¹⁾。

グロムイコの家環境は、貧しさを除けば悪いものではなかった。勤勉な父親は、息子が羨むほどの綺麗な文字を書くことができた¹²⁾。帝政期のロシアにあっては、一般庶民が教育を受ける場として教会と軍隊が見逃せない役割をはたしていたが、それでも彼の父の世代では軍務に就く男子の五人に三人は文盲であった¹³⁾。父は教会付属小学校を四年まで通い、日露戦争と第一次大戦に従軍していたのである¹⁴⁾。他方、母は村で「教授」とあだなされるほど本が好きであった。その母は彼に「お前は本が好きだね。先生が誉めているよ。お前は勉強しなければだめだよ。……きっと出世するよ」と励ましていた¹⁵⁾。向学心をもつ少年は、この家ではよき理解者を得ていたのである。既に13歳の時には村のコムソモール細胞の書記に選ばれていた¹⁶⁾のであるから、グロムイコは確かに親が期待するだけの利発な少年であったのである。しかも、他方では彼は、わずかな土地の分配をめぐる父と叔父がいさかいをおこすのを見て育った¹⁷⁾のである。革命による既成秩序の崩壊、豊かとは言えない家庭環境、そして強い学習意欲を考えれば、彼が父と異なる道で生計を立てようとしたのは自然であった。

彼はゴメリの町で7年制の中学校と職業技術学校を終え、さらにミンスクに近いポリソフにある中等職業学校(テフニクム)に進学した¹⁸⁾。ここで1931年に彼は黨員となった¹⁹⁾。この時期には国内では集団化が強行され、彼の生家も当然大きな影響を受けたはずであるが、グロムイコは回想録ではただ集団化を推し進めるために活動したとだけ記している²⁰⁾。彼の父は1933年に森にソダを取りにいて帰らず、見つけたときには意識を失っていたという。57歳の父の死²¹⁾は、当時の厳しい食糧状態と無関係であったのであろうか。

いずれにせよ、ポリソフで彼は学業に励むばかりか、黨員として集団化の宣伝や土曜労働、日曜労働に熱心に取り組んでいた。この時期、やはりベロロシアの農家の娘で、女学生であったリーディヤ・ドミトリエヴナと結婚もし²²⁾、ポリソフに移った次の年には、後に成人してアフリカ研究所の所長となる長男アナトリーが生まれている²³⁾。その意味で彼の生活は充実していたのであり、後年「困難にもかかわらず、温かい気分を当時を思い出す」と回想録に書いたとき²⁴⁾、それは正直な気持ちであったと思われる。

黨員としての忠実な活動と真面目な学習は、この後本人も予想しなかったほどの「報酬」をもたらした。中等職業学校卒業後に入学したミンスクの大学で2年間過ごす、彼は近くの中学校の校長に任命され、そこで働きながら大学教育をうけていた。そこに突然ベロロシア党中央委員会の特別代表がやってきて、彼に大学院に進むよう勧めたのである。驚いた彼がミンスクに赴いて問い質すと、既に彼についての学業及び政治方面の考査表が送られており、ミンスクにできたばかりの大学院で「実践家でもあり理論家でもある」幅広い経済専門家として養成したいといわれた²⁵⁾。彼は抜擢されたのである。もっとも彼は

それでも、わずかな奨学金で生活するのはもう沢山だと発言していた。中学校の校長の生活はそれなりに安定していたのである。結局、この勧めを受諾しなくてもミンスクに異動することになっていると言われて、ようやく大学院にすすむことを決心したのである²⁶⁾。以上の経緯からみて、もともとは研究者となる気はなかったのであり、専門的な研究をしていたわけでもなかったと見られる。

b 知的形成 グロムイコが以上のごとき申し出をうけた1933年頃は、急速な工業化の結果として、さらに、20年代末から30年代初めにかけてなされた一連の政治裁判、政治的摘発によって、革命前に自己形成を遂げていた、いわゆる「ブルジョア」技術者、専門家が多数逮捕・粛清されたため、経済の現場では運営に支障が生じるほど人材不足となっていた¹⁾。空いた真空を体制に忠実な人材で埋めることは国家の緊急の課題となっていたのである。よくいわれるように、1935年にレニングラード繊維学校を卒業したコスイギンが2年後に繊維工場の所長となり²⁾、同じ年にドニエプロジェルスク冶金大学を卒業したブレジネフがやはり2年後の1937年に同市のソヴエト副議長となっていた³⁾。グロムイコの場合も本質的にそれと変わらなかったのである。従って、この時の彼の抜擢は、彼が並み外れて優秀であったことを証明するものではなかった。彼はブレジネフ期の他の指導者と同様に、知的能力と政治的指向の2つの物差しでみて抜擢されるだけの資質をもっていたということである。

ミンスクの大学に入ると、最初の1年半は政治経済学、哲学、英語にほぼすべての注意がむけられた⁴⁾。英語の勉強はこの時が初めてであった⁵⁾。そうしている間にここでも予想外のことが起こった。1934年に不意に大学の指導部が、彼と同じようにして入学したグループの者に「君達のグループはモスクワの同種の科学研究をする所に移る」と告げたのである。こうしてこの年の3月、グロムイコは憧れのモスクワで研究活動することとなった⁶⁾。やはり、この時期までに彼の前任者たちに及んだ災いが、彼に破格の「好運」をもたらしたのであろう。

ここで1936年に彼は学位論文を書き上げ、同時に上級研究員として科学アカデミー付属経済研究所に勤めることとなった⁷⁾。1957年にG. アンドレーエフというペンネームで公刊された書物の題名『アメリカ資本の輸出——経済および政治的膨張の手段としてのアメリカ資本の輸出の歴史から』⁸⁾からみて、研究のテーマはアメリカ資本の対外的役割、あるいは、アメリカ資本主義の特質といったものであったと思われる。彼が何故アメリカを研究対象としたのか、回想録からでははっきりしない。あるいは後に述べるように、父親たちの話を通じて少年時から漠然とした関心をもっていたのかもしれない。

いずれにせよ、実際にアメリカをみて、しかも外務大臣になってから公刊された著作の内容は、最初に学位論文として書かれたものとかかなり異なっていたはずである。それよりは、この時期彼が編集長を勤めていた『経済の諸問題』誌に掲載した論文のほうが、その知識の方向と性格を探る手がかりとなりえよう。これは、1984年に刊行された彼の2冊目の著作集に再録されたもので、もともとは同誌1938年と39年のそれぞれ第1号に掲載されたものである。題名は前者が「共産主義の不滅の思想」で、後者が「レーニンの『ロシアにおける資本主義の発達』について」であった⁹⁾。ともに当時のものとしてはスターリン

賛辞が少なく、再録された時に一定の編集がなされた可能性は否定できないが、しかし、文意とその組み立て方までは変更されていないものと思われる。

同誌1939年第1号に掲載された論文は、おそらくレーニンが「ロシアにおける資本主義の発達」を著してから40年たったことを記念して書かれたものである。時代の雰囲気からして、このレーニンの名高い著作の批判的検討など考えられないことであったが、しかしそれにしても、ここでのグロムイコの姿勢はかなり慎重で著者の論旨の運びに忠実であった。もともとこの著作は、ナロードニキのロシア資本主義論を批判する明快な内容のものであるが、グロムイコの解説はそこから時代に適った問題を汲み取ろうとする姿勢に乏しく、論旨の重要部分を抜き出して順に並べたような体裁になっている。解説としては稚拙であるが、しかしそのかわりに、説明の流れそのものには無理がなく、彼がこの大部の著作を真面目に根気よく読んでいたことを示している。ナロードニキの批判と農民層の分解を扱った章はとりわけ詳しく説明されているが¹⁰⁾、説明ぶりからみて、この農民の子供は、社会発展の不可避的過程として農民層の二極分解を説く議論を、学問的真理として受け容れていたものと思われる。

それより1年前に書いた論文は「共産党宣言」90周年によせたものである。まだ彼は28歳であったが、既にこうした論文を書く地位についていたのである。ここでもグロムイコは共産主義にいたる歴史の段階的発展という議論を真剣に繰り返し強調していた^{10-a)}。しかしそれでも39年のものに比べれば、その議論はかなり自由に展開されていた。グロムイコによれば、「共産党宣言」が予想した「社会主義は我々の偉大な社会主義の祖国の生活にしっかりと入った。荒れ狂う資本主義的自然発生性の大海のなかで、ソ連は巨大な巖として立っている」のである。しかし興味深いことに、ここではかかる資本主義と社会主義の二陣営論から、そのままソ連と資本主義諸国との対立がひきだされているわけではなく、資本主義の「避け難い破滅の時期を引き伸ばそうとしているファシズム」のみが批判の対象として取り出されているのである。具体的に名指しされているのは、ドイツ・ファシズムと「イタリアと日本のファシスト的野蛮人」だけである¹¹⁾。ミュンヘン会議が開かれるのはこの年の9月のことであるが、しかし当時の基準からみてもここでグロムイコが防共協定の三国のみにふれ、イギリスやフランスにまったく言及しなかったのは一つの姿勢であった¹²⁾。これは彼自身が、まだ今後の成り行きに確信がもてなかったからであろう。39年の論文で組み立てが稚拙になったのも、確信がもてないことについて一切ふれようとしない姿勢の然らしめたものであったとすれば、両者は共通するものをもっていたのである。

いずれにしても、ここでも慎重さと歴史過程の不可避的發展に対する確信が、彼の知的傾向として明瞭に浮かび上がっていた。彼は最終的な社会主義の勝利を説くにあたって熱烈に論じるタイプでも、慎重なあまり自分の確信することまで曖昧に伝えようとする種類の人間でもなかったようである。

二つの論文は経済誌に発表されただけに、そこからさらに当時の彼の世界認識・対外観を引き出すことは困難である。少年時に彼は父親たちの口から、日露戦争や「老獪で賢いアメリカの大統領」セオドア・ローズベルトについて、好奇心をかきたてる生き生きとし

た知識を得ていた¹³⁾が、しかし当時の彼の周囲にはこうした断片的知識をつなぎあわせる本もなければ、そうした面で印象に残る人間もいなかったようである。少なくとも当時読んだものとして回想録にあげられている幾冊かの本¹⁴⁾は、同時代の世界の動きについて伝えるものではなかったし、そこには彼がこの点で特別に感化を受けたと感じる学校の先生の名前も挙げられていないのである。

彼が多少とも国際情勢について自分の知識を体系化し始めたのは、モスクワに上ってからのようである。34年から35年にかけて、彼は全連邦古参ボリシェヴィキの会がモスクワのミーラ通りで開いていた講演会を聴講していた。当然ながらそれは特に時局について論じるものではなかったが、しかし、そこではニコライ・モロゾフやベラ・クーン等の伝説的人物の回想ばかりか、30年代前半にコミンテルンの執行委員を勤め、健筆をふるっていたヴィルヘルム・クノーリンの演説を聞くこともできたのである。グロムイコは、この場数を踏んだ演者が、ヒトラー政権成立後のドイツを問題にしなから「何の予想もしようとしなかった」ことを印象に留めている¹⁵⁾。彼もまた居並ぶ聴衆とともに、この問題についてかなりの関心を抱いていたのである。

30年代の後半に入ると国際情勢はますます緊迫し、多くの人々と同様にグロムイコも「手に入るだけの世界情勢に関する情報をひたすらむさぼるように吸収していた。¹⁶⁾」しかしそれは当時のプラウダやイズヴェスチヤの紙面から考えて、他の国々に対してソ連が何をなすべきかを考えるには、質量ともに不十分であったはずである。まして当時のソ連外交に実際に携わっていた人々が直面していた状況など、彼にはまだ想像もできなかったであろう。彼が知っていたのは、反革命陰謀というおどろおどろしい罪状によって、彼らの何人かが裁かれたという事実だけであったはずである。

カラハン元外務次官は、赴任先のトルコから1937年初夏にモスクワにもどった後消息を断っていた¹⁷⁾。1937年まで次官であったクレスチンスキーも一旦法務人民委員になった後逮捕され、1年後には処刑された¹⁸⁾。ストモニャコフ次官も38年には解任され、逮捕の時を待っていた¹⁴⁾。こうした粛清によって1937年の半ばには、「外務省の活動の多くは停止したかのようであった。²⁰⁾」当時は全権代表と呼ばれた大使クラスでも事態は同様であった。1936年に主要な国に赴任していた大使のうち、第二次大戦の始まる39年まで逮捕を免れていたのは、イギリス駐在のマイスキー、スウェーデン駐在のコロンタイ、36年の駐独大使で37年から40年まで駐フランス大使を勤めたスーリッツ、36年に駐仏大使で、37年から40年まで第一外務次官を勤めたポチョムキンなどほんの僅かにすぎなかったのである。こうして生じた穴を埋めるために、さまざまな分野から多くの人々が外務人民委員部に入部することになった。グロムイコもその一人であったのである。

3 入部から訪米へ

a 1939年の外務人民委員部 1939年初頭、グロムイコは中央委員会の呼び出しで面接を受け、その年の春には、外務人民委員部にはいった。面接委員の中には、当時首相であり、5月から外相を兼任するモロトフと、書記局員でおそらくこの時期には人事を担当し

ていたマレンコフがいた。グロムイコが受けた質問の一つは「英語で何を読んでいるか」というものであった。彼が幾つかの英語の本を挙げると、それで面接は終了した。明らかに、質問は彼がどの程度英語ができるかを確かめるためのものであった¹⁾。

グロムイコの最初のポストはアメリカ担当部長であった²⁾が、しかしその時期は短かった。半年ほどで駐米大使館付き参事官として、つまり同大使館のナンバー2³⁾として転出したからである。彼が外務人民委員部の新米職員として何を学んでいたのか語る資料は、これまでのところ公表されていない。しかし当時の彼の様子は、この時期モスクワで勤務していたアメリカの外交官が回想に留めている。

「彼 [グロムイコ] は昼食をとるために [当時アメリカ大使邸があった] スパソ・ハウスにやってきた。彼はこの時初めて外国人と食事をしたのだと思う。経済学の教授であったグロムイコが、外交問題について事実上何も知らないことは明らかであった。彼は居心地が悪そうで、明らかに食事の間に何か失策をするのを恐れていた⁴⁾。」

グロムイコが気詰まりな様子をしてしていたのは、外交に不慣れであったからだけではなく。外務人民委員部では、この年の5月、リトビノフが外相の地位から解任されるのと同時に、大規模な査問がなされ多数の職員が解任されたり逮捕されたりしていた⁵⁾。グロムイコが外務人民委員部で最初から高い地位についたのは、このような打ち続く粛清によって、職員の不足が生じていたからに他ならなかったのである。そのことは同時に、残ったものの中に一つの失策も許されないという雰囲気醸し出していた。実際、この年の6月に、不用意に新聞の論説の誤りを指摘した第三西欧部の次長は、すぐに違う職場に左遷されていた⁶⁾。こうした状況で、彼が失策を恐れたのは当然であったのである。

回想録からみて、彼が前任者からそれまでの米ソ関係について引き継ぎの説明を受けたとは思われないが、あったとしてもそれはきわめて限られたものであったろう。9月にたまたま同人民委員部を訪れた新聞記者の次のような回想が、そのことを傍証している。

タス特派員としてストックホルムに赴く予定の彼が、事前の説明を受けるため外務人民委員部を訪れると、「『スカンジナビア担当官』の中にはストックホルムで働いたことがありそうな者は一人もおらず、彼らは私にその経験を伝えることができなかった。新聞部は、ごく最近から哲学の教授が指揮していたが、彼は新聞一般についてきわめて曖昧なイメージしかなく、スウェーデンのことについては何のイメージも持っていなかった。そのことを彼は気持ちのよい率直さで認めていた。彼の二人の若くて陽気な助手はまだ一度も国境を越えたことがなく、そうしようとしている人間に助言を与える決心がつかなかった。あれこれ口でもごもご言ったのち、この三人はただ私の道中の無事と成功を祈ってくれた⁷⁾。」

この時期の外務人民委員部の本省は、大別して3種類の人々より構成されていた。第一は、グロムイコのように、全く異なる分野から抜擢された人々よりなるグループである。1939年5月に38歳もしくは39歳で入部し、翌年から駐仏大使となるアレクサンドル・ボゴモロフ、同じく39年秋に27歳もしくは28歳で入部し⁸⁾、すぐにリトアニア駐在の参事官となるウラジーミル・セミョーノフ⁹⁾がこのグループに入る。ボゴモロフは入部前には史的唯物論を教えており¹⁰⁾、セミョーノフはロストフ・ナ・ドヌーの教師訓練大学でマルク

ス・レーニン主義学部の学部長をしていた¹¹⁾。おそらくこのグループはグロムイコも含めて、語学を別にすれば、思想堅固であることを重要な条件にして選ばれていたのである¹²⁾。

第二のグループは、現在の外交アカデミーの前身、外務人民委員部付属外交官・領事養成専門学校の出身者よりなる。この専門学校は1934年に設立され、2年の課程であったから、学生は1936年秋以降、毎年入部していた¹³⁾。1905年生まれて37年に入部し、43年からロンドン駐在の大使となるゲーセフ¹⁴⁾、06年生まれて42年から駐日大使となるマリク¹⁵⁾、同じく06年生まれて44年からアメリカ部の部長となるツァラプキン¹⁶⁾がその代表的人物である。37年から39年5月まで新聞部長を勤めていた人物は、以上挙げた3人を含む若干の同校卒業生が、30年代後半に外務人民委員部の上司たちの摘発に積極的に加わり、当時リトビノフと対抗していたモロトフによって後に報償されたと証言している^{17,18)}。

第三は、グロムイコ等と同様に他の分野から入部したのであるが、彼らほど若くなく、既に別の分野で長いこと働いていた人々である。リトビノフの解任直後にデカノゾフとロゾフスキーが外務次官となったが、前者はそれまで内務人民委員部の外事課長であり、後者は37年まで労働組合インターナショナルの書記長であった¹⁹⁾。30年代に外交問題と絡んだ政治裁判の検事として活躍し、40年に外務第一次官となるヴィシンスキー²⁰⁾、30年代にタス外国特派員として働き、40年5月に新聞部長となったパリグーノフも含め、彼らはすべてこれまで何らかの形で外交と結びつく経歴を有していた²²⁾。

以上の説明から推測される通り、新入りのグロムイコを取り巻いていたのは、39年5月までのソ連外交の形成に関わっていた外交官と著しく色合の異なる人々であった。彼らのほとんどは、全くといって良いほど外国生活の経験がなかった。それは、前任者たちが、スターリン期のソ連に珍しく、西側の文化と生活に通じていたのと際立った対照をなしていた。もとよりそれは、躍進してきた世代が無能であったということではなかった。この点で、30年代にモスクワで勤務し、後にイギリスの駐ソ大使を勤めたヘイターの次のような評価は、きわめて妥当なものであった。30年代末の「新人たちは確かにコスモポリタンではなく、またほとんど国際主義的でなかった。彼らは能率的で、よく訓練され、まじめで、幾分控えめであった²³⁾。」

人事の交替とともに、外交の在り方も大きく変わろうとしていた。39年5月以降、ノモンハン事件（5月から9月）、独ソ不可侵条約の締結（8月）、第二次大戦の勃発、バルト3国との相互援助条約の締結（9月から10月）、ソ・フィン戦争の開始（11月）と目まぐるしく進む情勢の下で、ソ連外交は戦争と密接不可分になっていた。グロムイコと同時期に入部したセミョーノフに言わせれば、「平和で議会的な国際連盟の時代は終わり、厳しい紛争と戦いの時代が始まっていた²⁴⁾」のである。このように、弱肉強食の世界と意識されていた時代に、グロムイコは外交の何たるかを身につけていったのである。

b 実務的な外交官 慎重なグロムイコは、入部後、まずモロトフとスターリンが彼と対米関係についてどのような考えを抱いているのか、理解しようと努めたはずである。その機会はずちに訪れた。スターリンが彼に出頭するよう命じたのである。日時は明らかにされていないが、前後の事情からみて第二次大戦が始まった9月以降のことと思われる¹⁾。

クレムリンの執務室で彼を迎えたのは、スターリンとモロトフであった。スターリンはすぐにグロムイコに対して、彼を参事官として駐米大使館に送る考えであることを明らかにした。さらにスターリンは、米ソ関係において特別な意義を与えるべき分野を手短かに説明し、ファシズムの脅威が高まる状況を考えると、アメリカのような大国と悪くない関係を維持したいと続けた。ここでスターリンがどのような分野を重視していたのかは明らかにされていない。ともかくその後に、彼はグロムイコの英語力について尋ね、既によく知られているように、語学力を高めるためにアメリカでは時々教会に行き、牧師の「純粋な英語」を聞くよう忠告したのである²⁾。

スターリンがモロトフとともに、外地へ派遣する外交官や使節を引見するのは決して特別なことではなかった³⁾。しかしグロムイコは、彼だけがそのような待遇を受けたのだと受け取ったかもしれない。この会見を終えて得た感触を、グロムイコは回想録に次のようにまとめている。

「会見の後、クレムリンから戻ると、習慣で体験したことを検討した。これより少し前に駐米ソ連大使、ウマンスキーが召還されていたことを思い出した。彼は明らかに中央の要求を充たしていなかった。つまり結論が自然に出てきた。私が信頼されており、重大な依頼を受けたということである⁴⁾。」

このまとめは、確かに回想時点での後知恵と自己顕示によって、要点を過度に誇張したきらいがある。しかし、少なくとも、教会で語学を学べといったスターリンが、帝国主義者の思想洗脳に注意しろと言ったとは思われない。明らかにスターリンは、この時期のグロムイコに対してそのような警告をするのは不要なことだと見做していたのである。スターリンが、ウマンスキー⁵⁾の活動に不満を感じていたとしても、そこからさらに、これまでの米ソ関係に不満を洩らし、「悪くない関係」をつくるため尽力するよう指示するといったことはあり得なかったであろう。語学も覚束ない新米外交官に、それほど「重大な依頼」をするほどスターリンは軽率ではなかったからである。おそらく、当時の国際情勢を指摘して米ソ関係はこれ以上悪くする必要はないと述べ、その方向で努力するよう指示したということであろう。それでも30歳のグロムイコにしてみれば、駐米大使館の参事官ポストは予想以上の厚遇であったはずである。

11月初頭迄にグロムイコ一家は、先の見込みのないウマンスキーとともにイタリア経由でアメリカに赴いた。それは彼にとって、初めて西側世界を見る機会であった。もとより、その時も、また回想録においてさえ、彼のような立場の人間にとって西側世界の魅力を語ることは好ましいことではなかった。しかし、古代の遺蹟は別にしても、西側世界は、ちょうどこの時期の陽光のようにグロムイコを惹き付けるものをもっていただようである。回想録の中でこの時のことを書いた部分は、温かな懐旧の念で満ちているからである⁶⁾。

しかし、グロムイコにとって最初の任地となったワシントンは、旅行中の楽しさなどたちまちのうちに霧散させる状態にあった。それまでも米ソ関係は決して友好的とは言えなかったが、しかし39年のソ連の一連の行動によって状況は一段と悪化していたのである。とりわけ、11月30日にソ連軍の侵攻で始まったソ・フィン戦争は、それまでドイツをヨーロッパにおける主敵と定めて、直接的なソ連批判を避けてきたローズベルトにとっても無

視することのできない事件であった。ソ連に対して飛行機や関連機材の発送を見合わせるようすすめる、「道義的輸出禁止」が導入された。さらに議会内には、米ソ間の外交関係を断絶すべしという声すら上がっていたのである⁷⁾。

グロムイコはこうした状況を悉さに追っていたはずである。それでも回想録の中で彼は、既に40年半ばの時点で、ローズベルトの大統領三選がソ連にとって望ましいとみなしていたかのごとく書いている⁸⁾。事実であるとすれば、それは上司のウマンスキーの姿勢とかなり異なるものであった。この時期ソ連大使は、あらゆるアメリカの動きにソ連を陥れようとする策謀を見ていたのである。たとえば40年3月には、彼はウェルズ國務次官の西欧歴訪に関連して次のように報告を書いていた。

「[現時点では英仏とドイツの間の] 戦争の早期終結はローズベルトの計算に入っていないが、ウェルズが我々とドイツ人の間に楔を打つ可能性を感じとりさえすれば、現実的な意味を持つことでしょう⁹⁾。」

41年1月になってもウマンスキーのアメリカ理解は変らなかった。彼の目にはローズベルトの下ですすめられた米ソ協議も、「ソ日関係の改善を阻止し、またソ連とドイツ間の関係の悪化の可能性をさぐり、ソ連の対外政策に影響を与えるために通商問題を利用しようとする」¹⁰⁾ものと映っていたのである。

6月22日に始まった独ソ戦は、かかる現実認識を根底から覆すものであった。しかしこの期に及んでもウマンスキーは、大統領は「ドイツの勝利の展望」と「我が方の『行き過ぎた』壊滅的勝利の展望」との間で動揺していると報告していた。後者の展望は、ローズベルトにとって、その「階級的立場」から相容れないものだというのである¹¹⁾。当然ながら開戦後の数日間、彼は、苦況に陥った祖国を救うための策を何一つ採ろうとはしなかった。

本国政府の混迷ぶりも、これとさして変らなかった。ようやく26日になって、モトロフは「米国政府の今次の戦争およびソ連に対する態度を問い合せるよう」指示したのである¹²⁾。それはロンドン駐在の古参大使マイルスキーが、この時を予想していたかのごとく、自らの判断で英ソ接近にむけて策を講じていた¹³⁾のときわめて対照的であった。

39年に、独ソ不可侵条約を前にして外相の地位を解かれたリトビノフも、この状況の大転換をうけて、駐米大使として外交舞台に復帰することになった。この年の秋になって、ようやく評判の悪かったウマンスキーが、訪ソするハリマンに前後して帰国したのである。しかし、リトビノフがグロムイコの上司として着任するまでにはまだ間があった。二人の大使の帰任と着任の合間となった10月と11月に、グロムイコは代理大使として幾つかの報告を書いていた。注目すべきことは、そのいずれにも、後年の「ミスター・ネット」の姿を彷彿させるものは微塵もなかったという事実である。

利用し得る最初の報告は10月10日付けのものである。そこでグロムイコは、武器貸与法をソ連にも適用させる法律が下院において可決されたことを伝えていたが、重要なことはそうした内容よりも、その説明の仕方であった。そこから、この時期のアメリカの政治に対するグロムイコの理解が伺えるからである。まず第一に問題にすべきは、グロムイコがこの時期の政治の構造をどのように捉えていたかという点である。彼の前任者は、7月10

日にローズベルトに初めて会って以来、一転してその賛美者になり、ローズベルトと「取り巻きの進歩派的サークル」が軍部や官僚の「サボタージュ」と闘っていると報告し続けていた¹⁴⁾。彼は、ローズベルトの意向がすぐに実現しないのは、官僚たちが妨害しているからだと考えていたのである。これは、典型的なミラー・イメージの産物であった。30年代の粛清の論理を、そのままアメリカの政治に適用したものであったからである。グロムイコの描いた構図はこれとかなり異なっていた。彼はここで、事態を「ローズベルトの多数派」と「孤立主義的共和党员」の対立として説明したのである¹⁵⁾。後に述べるように、グロムイコは翌年8月の報告でも、アメリカ外交における孤立主義的傾向の強さに着目していた。この点を重視することによって、彼は反対勢力を悪意を持った陰謀集団であるかのごとく見做す前任者とは異なる理解に立つことができたのである。

第二に、アメリカの政治において大統領がどのような位置を占めているのかという問題でも、グロムイコの理解は前任者と異なっていた。グロムイコは、要所に占める個人が政治において重要な役割を果たしていると認識していたが、しかしこれは格別彼に固有のものではなかった。ウマンスキーもそのように見ていたのである。重要なのは、グロムイコが報告で、大統領は反対勢力を破るために「周到な準備をしてきた」と背景を説明している点である¹⁶⁾。ウマンスキーは、大統領をきわだった権力の持ち主と捉えがちであったが、これに対してグロムイコは、様々な方向を持つ諸勢力と時に応じて連携・対立する存在として、ローズベルトを理解していたのである。この理解は、宗教問題についての彼の説明からも確認できる。グロムイコは、「ソ連における信教の自由の欠如という中傷によって」、これまで反対派は「教会勢力」と組んで援助に反対してきたので、ソ連政府によって最近出された宗教問題に関する声明は、彼らの論拠を破る上で効果的であったと書いているのである¹⁷⁾。

この声明は、ハリマンが伝えた大統領の要請に応じて、急遽ソ連政府が出したものであった¹⁸⁾。グロムイコは当然そのことを知っていたはずである。しかし、彼の報告を読めば、声明要求を、大統領個人の政治的信念の下にソ連の内政に介入しようとする試みと解釈することは不可能であった。つまりグロムイコは、この要求は反ソではなく親ソの意図から出たものだと説明したことになるからである。

グロムイコはこれより一カ月後、初めてローズベルトと面会し、彼について電報を書いていた。そこでのローズベルト評は次のようなものであった。

「私が個人的にローズベルトとあったのはこれが初めてです。この会談で私が得た印象では、彼がドイツ人を憎んでいること、そして毅然として、少なくとも現時点では、我々に援助を与える路線に立っていることは疑いを容れません。」¹⁹⁾

グロムイコの慎重な性格を反映して、「少なくとも現時点では」という限定句が付されているが、引用した2本の電報をあわせ見れば、グロムイコが早くから政治家としてのローズベルトをきわめて高く評価していたことは明らかであった。彼は回想録でローズベルトを「アメリカの最も傑出した為政者」と呼び、敬愛の念を吐露しているが²⁰⁾、これは必ずしも後知恵の産物ばかりではなかったのである。

さらにその次の日に書いた電報は、彼が当時どのような人物を評価していたのかという

問題を考える材料として興味深いものである。これは、ローズベルトがソ連に対する物資補給問題の指導担当としてステティニアスを指名した事実を報告したものである。ここでグロムイコは、この新任の担当官について次のように書いていた。

「ステティニアスという人物に関して言えば、私は悪くないという意見です。この意見は最近幾度か彼と会った結果生まれたものです。ステティニアスは生粋のビジネスマン、実務の人で、实际的です。我々に対する対応は礼儀に適っています²¹⁾。」

この人物評と先に引用したローズベルト評が示すように、グロムイコにとって、進歩的か保守的かといった問題はその人間を評価する上で最も重要なことではなかったのである。実務的人間によくあるように、相手が自分の仕事にどこまで役に立つかが他人を評価する上での最大のメルクマールとなっていたと言えよう。

総じて言えば、グロムイコのこの時期の報告は「当地ではよくあるように」といった表現に伺えるごとく、既にアメリカの内情をかなり把握したという自信に満ちていた。彼の発想は、繰り返せば、進歩か保守かといった思想的立場よりも、当面の仕事に役立つかどうかという実務的側面を重くみる傾向が強かった。言うまでもなく、このことは最終的にアメリカを含めた全ての国が社会主義となるという確信と、何ら矛盾するものではなかった。彼はちょうど、上部の政治状況を論ずるのに、下部の経済構造から分析しなければならないとは考えなかったように、思想的立場から仕事の相手を決めねばならないとは考えなかったのである。元経済学者は、実務的外交官としてその才能を発揮しはじめていたのである。

c アメリカ専門家 65歳の新任大使リトピノフは、日本軍の真珠湾攻撃とほぼ同時にワシントンに到着した¹⁾。赴任後の彼の活躍は目覚ましかった。一方で彼は、物資補給と第二戦線問題に関して、アメリカ側に要求すべき論点を進言し、他方でアメリカ政府の意向を的確にモロトフに伝えていた。とりわけ後者の問題では、42年4月11日付の彼の電報は見逃すことのできない一文を含んでいた。これは、アメリカ政府がモロトフを協議のために招請したことに関連して、彼の意見を述べたものである。

ここでリトピノフは、まず、会議で第二戦線の問題が協議されるとしたら、何故主力となるイギリスで行なわないのかと疑問を呈した後、次のように続けていた。

「それ故私は、貴下を招請するにあたって、大統領はソ日関係に関連する提案を念頭においているものと考えます。その他、彼はまたおそらく、私を通しては何の説明も、時には回答さえ得られない、バルト、ポーランド、フィンランドについて、中国への援助について、アラスカへの空路その他について、討議したいと望んでいることでしょう²⁾。」

「私を通しては何の説明も、時には回答さえ得られない」という一節は、モロトフに対する痛烈な皮肉であった。公表されている外交文書集でも、こうした例を見出すことができる。3月12日にリトピノフは、ソ連の西部国境問題に関して英ソ間で協定を作成することにローズベルトが懸念を表明している旨伝え、結びで、「大統領はバルトに関して我々からの何らかの回答を待っているようだ」と書いていた³⁾。これに対してモロトフは3月23日に、これはローズベルトのイギリスの質問に対する回答であり、我々は「彼にかかる問題を提起していない。」「我々はこのローズベルトの通知を、回答を求めている情報供

与と見倣している」と答えたのである⁴⁾。木で鼻をくくったような回答は、何も西側の人間にだけ出されていたわけではなかったのである。

グロムイコは、これより間もなくモロトフとリトビノフの間で生じた口論を目撃している。それはモロトフがロンドンを経て、ワシントンにやってきた際に、三人を乗せた車の中で起こったものである。グロムイコによれば、話題が第二次大戦前夜のイギリスとフランスの外交政策に及んだとき、モロトフが厳しくこれを批判したのに、リトビノフは「かかる英仏の政策に対する評価に同意しない」と述べたのである。グロムイコは続けてこの「陰悪な会話」は、さらに「本質的に」1939年のリトビノフの解任の決定にまで及んだと書いている⁵⁾。

グロムイコは何も書いていないが、イギリスとフランスの立場を弁護したトリビノフにしてみれば、この時期の外交上の失敗は何も英仏政府にのみ非があったわけではなく、ヒトラーのドイツに対するソ連政府の対応にも問題があったということであろう⁶⁾。興味深いのは、かかる場面に出くわしたグロムイコの反応である。彼はこの時自分がどのように対処したのか述べていない。しかし、この凄まじい対立について彼がどのように考えたかは書いている。それは次のようなものである。

「私はリトビノフが、……イギリスとフランスの政策を弁護しようとするその執拗さに驚いた。リトビノフは、とりわけイギリスとフランスの政策に対する評価で誤った立場を採ったことから、外務人民委員職より解任されたにもかかわらず、それでも彼は何故かモロトフに対して、そのことによってもちろんスターリンに対して、自己の見解を強く示し続けたのである。」「私は、モスクワに帰国後、モロトフがこの車の中の口論をスターリンに報告することを疑わなかった。同様に、既にこの一事からして、合衆国における大使としてのリトビノフの活動の展望に陰りがさすことも疑わなかった⁷⁾。」

かかる評価からみて、グロムイコには、リトビノフがとった行動は、たんに時期はずれの、しかも何の見通しもない、自己弁護とみえたようである。しかし既にみてきたごとく、モロトフ訪米前の両者の関係を考えれば、問題はそのような個人的レベルにはなかったはずである。より深く、39年5月以降の外交の変化を踏まえた原則的問題に関わっていたと考えねばならない。あるいは、そのことを見越した上で、グロムイコは回想録で一貫してリトビノフに冷たく対応し⁸⁾、モロトフとスターリンに対しては好意的な描写をしている⁹⁾と考えることもできる。

いずれにしても、回想録で述べる通り、当時のグロムイコには、二人がなぜ戦前の問題をめぐって論争するのか、その意味さえわからなかったというのは事実であったと思われる。それは、彼が入部以来一貫してアメリカを担当してきたこと、そしてそのアメリカは30年代の間、ヨーロッパと一定の距離を保つ孤立主義の外交をすすめていたことと、十分符合するからである。総じて回想録においても、またその他においても、グロムイコがロシア・ソ進外交史について言及することは稀であり、あってもきわめて表面的なことに限られていた。この事実は、彼が外交官になる前はもちろん、なった後も、戦間期のヨーロッパの外交について学ぶ機会をもたなかったことを示している。しかしこの時期に関して言えば、それだけグロムイコはアメリカの問題に注意を集中させていたということである。

この方面での彼の勉強の成果は、これより2カ月後に書かれた「第二戦線の問題と合衆国の戦争準備」と題する長文の報告書¹⁰⁾が示している。

グロムイコが報告書を書いた1942年8月14日までに、第二戦線の構築問題は連合国間の最大の論点となっていた。この問題は、先のもロトフの訪米の際、ローズベルトが1942年中に第二戦線を作ると言質を与えた¹¹⁾ことから生じたものであった。ソ連側は早急に第二戦線を開設することを重視して、42年5月から6月にかけて、領土問題に関する取り決めを含まない英ソ同盟条約¹²⁾と米ソ協定¹³⁾を締結することに同意したのである。それだけに、42年中の戦線開設は不可能であるとする意見は、ソ連側、特に折衝に当たったモロトフにとって当然不愉快なことであり、自らの詰め甘さを認めたくなければ、感情的にでも強く同盟国の約束違反を主張せざるをえないことであった。グロムイコの報告書はこうした状況をうけて書かれたものであった。折からモスクワには、この問題をめぐって誤解が広がることを恐れたチャーチルが訪問しており、報告書はきわめて時宜に適ったものであった。

報告書は、国民感情、政府の意向、陸軍・海軍内の動向、軍需生産・軍事動員の現状、さらに最近のジャーナリズムの動向を順に説明して、全体としては「精力的に戦争準備がなされているが、第二戦線の開設にむけた実際的措置は合衆国の側からはなされていない¹⁴⁾」と結論づけるものであった。以上のまとめからも推測できるように、明快な論旨と視野の広さによって、この報告書は、少なくともモスクワの読者にはきわめて説得的であったものと思われる。32歳になったばかりのグロムイコは、ここぞとばかりにその力量を印象付けようとしたのであろう。

報告書の特徴は、次の5点にあった。

第一に、第二戦線の開設が遅れているのはローズベルト以外に問題があるからであるとし、大統領には消極的ながら支持を与えていること。

第二に、年内の開設を困難にしている要因として、アメリカ政府が対日戦を重視していること、陸海軍内、特にその上層部に反ソ的気分が強いこと、「あたかも第二の天性となっている」孤立主義¹⁵⁾から離れることが容易でないこと、とする明快な、むしろ些か明快すぎる説明を3点あげていること。

第三に、そのうち特に、軍上層部内の反ソ的傾向を重視し、その一部にはヒトラー宥和の気分までであると警戒心を示していること。

第四に、アメリカの軍需生産力・戦時動員については、きわめて順調に増大しているとする見方を示し、この面ではかなり楽観的であること。

第五に、最近では、第二戦線の早期開設を主張しているのは「相対的に独立し、自己の見解を表明することを恐れない¹⁶⁾」権威あるジャーナリストに限られているとし、世論形成の変化に着目していること。以上である。

全体として見るならば、この報告書を書くにあたって、グロムイコは、軍部の一部の動向に警戒心を抱きつつも、大局的にはアメリカの戦争へのコミットメントに不安を抱いていなかったと言えよう。この意味では、報告書は短期的には甘い期待をうち破るものであったが、しかし長期的には、上層部の不安を鎮める上で役立つものと思われる。

総じて、この長文の報告書を読めば、グロムイコがアメリカ専門家として急速に成長していることは明白であった。しかし外交官としてはまだ一人前とは言えなかった。そのことは報告の結論部分をみれば明らかである。ここで彼は、「イギリスが近い将来に第二戦線の開設に断固たる立場をとる場合にのみ」、アメリカを動かすことができる¹⁷⁾と意見を述べていたのである。当初からアメリカ以上にイギリスが、第二戦線の早期開設に反対していたのであり、事態が動くとなればそれは進んで年内開設を約束したローズベルトの側からでしかなかったのである。グロムイコはまだ連合軍全体の関係について考えを及ぼすことができない、アメリカ専門家でしかなかったのである。

4 戦中から戦後へ

a 大国の駐米大使 後の時代から見れば、1943年初頭のスターリングラードにおける勝利は、独ソ戦におけるソ連の戦略状況を根本的に転換させるものであった。しかし、苦しい戦いを続けてきたソ連側には、戦線での勝利の後にすぐに戦後構想に着手する余力はなかった。ソ連指導部は、41年から42年にかけてのモスクワ攻防戦の勝利を背景に、42年1月末に外務人民委員部にモトロフを議長とする戦後処理委員会を設置した¹⁾。しかしその後の戦局は、同委員会を機能させるものではなかった。

ローズベルトの「世界の警察官」提案を除けば、ソ連側が再び戦後の事態に関心を示したのは、マイルスキーが43年3月10日に訪米前のイーデン外相と会ったときだとされている。マイルスキーは、イーデンがワシントンで戦後問題を討議することを念頭において、この会談で初めてソ連・ポーランド国境を「ほぼカーゾン・ラインのようなもの something in the nature of the Curzon Line」とするよう示唆し、一連の条件を述べたのである²⁾。

これまでこのマイルスキーの発言は、ソ連指導部の意向の表明であると解釈されてきた³⁾。しかし、ソ連側の当該の外交文書によると、駐英大使が指示を受けていた気配は皆無である⁴⁾。さらに上記の条件も、連邦案の受容のように後のソ連政府のそれと大きく異なるものである。従って、同案はあくまでマイルスキーが個人の考えとして出していたものと思われる。

モトロフに書いた報告から見て、ワシントンのリトビノフも、戦後処理の問題について何も指示を受けていなかったものと思われる。彼は3月末にイーデンとハル國務長官から聞いた話として、英米間でドイツの分割、チェコスロヴァキアの復活、バルカンその他の連邦等について意見が交換されたと伝えていた⁵⁾。この後におこった彼の本国召還は、一般に、6月半ばに帰国命令が出たマイルスキー⁶⁾と合わせて、ローズベルトとチャーチルが6月4日に第二戦線の年内開設は不可能と通知した⁷⁾ことに対するソ連側の不満の意思表示と解釈されている⁸⁾。しかし、少なくともリトビノフに関する限り、彼は遅くとも5月26日迄には帰国しており⁹⁾、従って英米政府の通知以前のことであったのである。

この時期スターリンは、カチンの森事件を契機にロンドンの亡命ポーランド政府との外交関係を断絶し¹⁰⁾、さらに6月11日には、先に言及した第二戦線開設の延期通知に対して、ソ連にとって不都合な上に「[ソ連の]参加も共同で討議する姿勢もなしに」採られた決

定に賛同しないと厳しく同盟国を批判していた¹¹⁾。しかし、7月にド・ゴールへの対応でアメリカ政府の要請を受容れた¹²⁾事実が示すごとく、緊張はあるにせよソ連側の大連合維持の考えが変わったわけではなかった。

かかる状況にあった7月30日に、駐米代理大使グロムイコは、ローズベルトの発言に機敏に反応して、イタリア情勢に関して「ローズベルトとチャーチルの間で少なくとも何らかの予備的合意があると考え」と報告した¹³⁾。この月に書かれた電報からみて、彼は次第に戦後の米ソ関係がもつ重大な意味について考え始めていた¹⁴⁾。しかし、その理解はまだ漠然としており、ポーランド問題やバルト問題でソ連の意思を受け容れさせ、同時に良好な米ソ関係が維持できると考えていたものと思わめる¹⁵⁾。この30日の報告も、今後起こる戦後処理の諸問題について、拠り所とすべき指示を求めたというより、たんに、イタリア問題で英米連合に出し抜かれる恐れがあると懸念する調子のものであった。

指導部にも、期待を別にすれば、明確な指針はなかった。唯一つ明快なことは、敗戦国との対応にあたって、英米連合と対等の権利が保証されなければならないということであった。ようやく8月19日になって、ローズベルトとチャーチルより、イタリアが無条件降伏を申し出てきたと知らされる¹⁶⁾と、スターリンは22日に次のように書いた。

「これまではアメリカとイギリスが申し合わせて、その後に、ソ連は第三の受動的なオブザーバーとして、その申し合わせの結果について情報を受けとるという状態であった。今後はかかる状態を続けることは不可能だと言わねばならない¹⁷⁾。」

ここで初めてスターリンは、戦後世界の構築にソ連も英米と対等の資格で参加する権利があると主張したのである。しかし同じ書簡でスターリンは、「ドイツから脱落した様々な政府との〔休戦〕交渉問題を検討するために」三国軍政委員会を設置するよう提案もしていた¹⁸⁾。少なくとも文意からすれば、この提案は、イタリアとの休戦交渉にソ連の発言権を要求する代わりに、今後赤軍によって解放されるであろう東欧との休戦交渉に、連合国の影響力が及ぶことを認めるものであった。しかし、「ドイツから脱落した」最初の国であるイタリアとの休戦交渉は別の先例をつくるものであった。イギリス政府は先に簡単なイアリア休戦案を示していた¹⁹⁾が、その後、英米両国で一方向的に合意した包括的な休戦協定案を示し²⁰⁾、翌9月には事態急変を理由にソ連側の同意を求めて、アイゼンハワーを全権として休戦協定を締結したのである。この手続きは、モスクワの終戦処理の考え方に大きな影響を与えたものと思われる。正確な日付は不明であるが、9月初頭に、政治局は、外務人民委員部の下に二つの委員会を設置した。リトビノフを議長とする講和条約及び戦後処理問題委員会と、ヴォロシーロフを議長とする休戦問題委員会である²²⁾。

講和と休戦を明確に区別した上で、後者の委員長にアイゼンハワーと同じ軍人のヴォロシーロフを任命し、しかもこの委員会にイギリスの連邦構想に詳しいマイスキーを加えていた事実²³⁾は、委員会設置の決定が、イタリア休戦問題での連合国の対応と東欧地域に対するイギリスの構想を十分に配慮してなされたと推定させるものである。他方リトビノフの委員会は、彼以外に、ロゾフスキー外務次官、マヌイルスキー元コミンテルン執行委員会幹部会員、スーリッツ元駐仏大使、それにヨーロッパ史家のタルレを含んでおり²⁴⁾、前者の軍人優先の構成と大きく異なっていた²⁵⁾。42年のときのように、講和問題を扱う

委員会の議長にモロトフを据えず、リトビノフを起用したのは、それだけ戦後世界に対するアメリカの意向を重視していたからであろう。

10月にモスクワで開催された3国外相会談は、以上の委員会による周到な準備を伺わせるものであった。ここで、ルーマニア、ハンガリー、フィンランドとの休戦交渉着手にあたってはソ連に決定権があることが認められ²⁶⁾、さらに、東欧地域の連邦構想は三大国が積極的に支持すべきではないとされた²⁷⁾。このときまでにソ連側は、はっきりと赤軍による隣接国の解放を視野に入れていたものとみられる。もとよりソ連の提案のみが認められたわけではなく、イギリスの提案したヨーロッパ諮問委員会の設置がきまり²⁸⁾、アメリカの提案した国際的組織の創設を規定する四カ国宣言が採択された²⁹⁾のである。

モスクワ会議は、ソ連側にとって、第二戦線を44年春に開設するという確約を得た³⁰⁾ことでも、また国際会議において初めて世界政治に対する英米と対等の発言権を得た機会としても、満足を与えるものであった。11月6日のスターリンの革命記念日演説は、枢軸同盟の解体ぶりを嘲笑して英米ソ連合の結束を誇り、同時にヨーロッパの解放にむけて進む決意を示すものであった³¹⁾。

奇しくもスターリンが大国として対等に扱うように主張した8月22日に、グロムイコの駐米大使任命が発表された³²⁾。彼と同じように39年に入部し、マイルスキーの帰国後に駐英代理大使を勤めていたソボレフが参事官のままに留まった事実³³⁾が示すように、グロムイコの昇進は決して順送りではなかった。また、上記のごとき背景を考えれば明らかのように、スターリンの孤立主義の産物でもなかった。グロムイコの実力が評価された結果であった。しかし、評価が際立って高かったと考える必要もなかった。人材がいなかったことも事実であった。マイルスキーの後任大使も30台半ばのグーセフであったのである。スターリンが彼らを見る目は、大使に任命しながら、この年11月から12月に開かれたテヘラン会談に、どちらも参加させなかった事実³⁴⁾が何よりもよく示していた。彼らに任されていたのは、自国と赴任国の意向を正確につかみ、伝えることでしかなかったのである。

10月4日にグロムイコはローズベルトに信任状を提出した。既にこの頃までに、彼は実務的判断と有能さでハルに好印象を与えていた³⁵⁾。この席でも、新大使として米ソの友好に努めたいと述べるグロムイコに、大統領は関係がさらに良くなれないと考える理由はないと応じた。信任状の授受にあたってのグロムイコとローズベルトの演説が、2日後のイズベスチヤに掲載された³⁶⁾。新大使としては上々の船出であった。

しかし、関係はこれ以上良くならなかった。11月に書いた2つの電報で、グロムイコは全般的な好意的雰囲気の中で、一部の新聞に反ソ的言動があることを伝えていた³⁷⁾。翌月テヘラン会談についての世論の反響をまとめた際に、彼は同様の姿勢ながらこれまでよりは詳しく大勢と異なる意見を伝えていた。とりわけ興味深いのは、テヘランで採択された諸宣言にポーランド問題に関する決定がないことを理由に、会談を否定的に評価する者がいると報告している点である。グロムイコの叙述は、この人物を「若干の反動的評論家たち」とはっきり区別していた³⁸⁾。この取り扱いからみて、グロムイコはこの時まで、東欧の問題が以前に考えていたほど簡単に解決できるものではないと理解し始めていたのである。

44年になると、ポーランド問題は連合国内の最大の争点となった。テヘラン会談の際にソ連はカーゾン・ラインをチャーチルとローズベルトに受け容れさせていた³⁹⁾が、もはやそれだけではなく、そこに自国に友好的で、しかも連合国内に正当と認められる政府をつくろうとしていた。ソ連側は1月半ば迄に、英米ソの3国に在住のポーランド人を加えた新政府をつくる案を思いつき⁴⁰⁾、アメリカに住む二人のポーランド人を招請した。2月21日、グロムイコはこの件でローズベルトを訪れ、次のように報告した。

大統領はその反応からみて、この二人について「何も聞いていないか、聞いても忘れていたようだ。いずれにしても彼はこれらの名前をまったく知らなかった。」

グロムイコはさらに、大統領が、ポーランド人には外部からの圧力なしに政府の改組を図りたいとする希望がある、と述べたと書いていた⁴¹⁾。当然ながら彼は、それが11日にローズベルトがスターリンに伝えた見解⁴²⁾の繰り返しであることを知っていたはずである。しかし彼はその事実を無視して発言をそのまま記載した上に、この問題について何の判断も示そうとしなかった。上述の文章から自然に引き出される結論は、かかる改組案では、アメリカの賛同は得られないということである。しかし、グロムイコはそのことをスターリンとモロトフに正面からは述べたくなかったのである。結果としてソ連政府は、4月になってもこの成功する見込みのない思いつきを実現しようとしていた。

グロムイコは5月10日にも、一時帰国していたハリマン駐ソ大使と米ソ関係一般に触れながらポーランド問題を話題にしている。ここでは彼は自分からはポーランド問題に言及せず、ただ「合衆国内の一定のグループと、遺憾ながら影響力をもつ一定の新聞の、[米ソ双方の]利益に反して進もうとする動きに不安を感じる」と水をむけ、ハリマンから、彼もまた「これらのグループのうちポーランド人がソ連に対しとりわけ悪い関係にあると思う」という発言を引き出していた。さらにここで彼は「ハリマンの意見によれば、ポーランド問題は合衆国のソ連に対する世論の一定部分に影響を与えるもののひとつである」と書いた⁴³⁾。相手の意見のように述べているが、しかし、これもグロムイコの判断と見るべきであろう。この問題に対するハリマンの意見は、モロトフもスターリンもモスクワで既に十分に聞いており、長々と書く価値などなかったからである。ここでもコメントを控えているが、明らかに、彼もまた事態が米ソ関係にもつ深刻な影響に思いを廻らせていたのである。しかし、スターリンは逆の方向に進んでいた。この年初めにポーランド国内で樹立された、親ソ的だが、弱小な政権を認めようとしていたのである。

これまで4年間の外交官暮らしで、グロムイコは上層部への批判的意見の具申が何をもちたらずのかよく理解していたことであろう。しかもポーランド問題で彼にできることはきわめて限られていた。そのことを考えれば、彼の自己保全は理解できなくはなかった。しかし、こうした姿勢はこれにとどまらず、逆に、上層部におもねる傾向も生み出していた。ハリマンと会った5日後に、グロムイコは訪ソ前のジョンソン商業会議所会頭と会談した。報告で、アメリカの大企業は今後のソ連との貿易関係に関心をもっているとする会頭のことばを紹介し、続けてグロムイコは次のように書いた。

「未来の平和維持の分野での[米ソ]双方の政治的利害の共通性について、二国間の積極的貿易関係を維持する有益性について、今後のあらゆる国際問題に対する、世界の大国

としてのソ連と合衆国の決定的な影響力について、多くのことを〔会頭は〕語った。こう語る際に、ジョンソンは常に、未来においてはイギリスはアメリカの役割にも、ソ連の役割にも太刀打ちできないだろうと努めて強調した⁴⁴⁾。]

これは、将来の連合国間の関係を考える上で興味深い見解であった。しかし、この時点でのソ連の国力と世界大の影響力を考えれば、明らかに多分に外交辞令的要素を含むものであった。そのことは、アメリカに住み彼我の国力の差を知るグロムイコには自明であったはずである。それにもかかわらず、彼は上層部に歓迎される見解とみなしたのであろう。特別なコメントも加えずにこの長い発言を伝えたのである。

b 国連の創設者 2週間後の5月30日に、ハルはグロムイコとイギリス大使ハリファックスを呼び、国際的な平和維持組織を審議する国内的準備が整ったと告げた¹⁾。この時から、モスクワとテヘランで原則的に合意した国際組織の創設に向けて、三国間の活動が本格的に始まった。この通知の直後にグロムイコは本国へ召還された。来たるべき国際的協議のためであったことは疑問の余地がなかった。この後8月12日にダンバートン・オークスに向けて代表団を率いて飛び発つ²⁾まで、グロムイコが国内でリトビノフ等とどのような準備をしていたのかは不明である。代表団は、グロムイコを代表に、ソボレフ駐英参事官、ツァラプキン・アメリカ部長、ロディオーフ海軍少将、スラーヴィン陸軍少将、その他数人の教授、通訳のベレシコフという実務的な構成であった³⁾。この中では、アメリカ政治に対する経験と知識においてグロムイコは抜きんできており、会議の前に皆にさまざまな注意を与えていた⁴⁾。35歳の彼が代表であったという事実から、スターリンとモロトフが国際組織の創設を軽視していたと結論づけるのは正しくなかった。前年の12月からロンドンで開かれていたヨーロッパ諮問委員会でも、ソ連を代表したのは若いグーセフであり、ここでは講和問題の要であるドイツの戦後処理について議論が積み重ねられていたのである⁵⁾。

12日に英米連合国に手交されたメモランダムからみて、ソ連側は国際組織が成立するのであれば、何よりも、連合国の軍事力によって平和を維持する機関となることを期待していたものと思われる⁶⁾。理事会を安全保障問題に専念させ、国際空軍の創設を唱え、「侵略」概念を重視する姿勢は、すべてこの目標を目指すものであった。しかしそればかりではなかった。以上が積極的な、しかし全面的に実現される可能性の乏しい希望であったとすれば、最小限の目標は、現在の連合国によって包囲あるいは制裁される事態を防ぐことであった。10日に政治局によって採択された指令は、未来の安全保障理事会では、理事国が侵略を防止し鎮圧する問題に関して拒否権をもつことが不可欠であると強調していた⁷⁾。

21日から始まった会議では、総会よりも理事会に権限を集中させ、その上、理事国に自国が紛争当事国となった際にも拒否権を認めるというソ連の立場が、英米両国に大国中心主義として批判された。グロムイコの見解では「大国はその責任に見合った特別な地位をもつべき」であった⁸⁾。また拒否権の問題では交渉の余地がないことはいうまでもなかった。しかしこの点を除けば、この会議の間、グロムイコは極めて協動的であった⁹⁾。彼は本国にアメリカ政府の反応を詳細に伝えていた¹⁰⁾。英米連合国を仰天させたソ連の16共和国の加入要求にしても、彼は本国にハルとの会談内容を伝える報告の中で、わざわざ、

ソ連がかかる要求に固執するならばアメリカは国連に加入できないかもしれないというステティニアスの言葉を想起して、アメリカの拒否反応の激しさを強調していた¹⁴⁾。

会議において議論をおこした大国中心主義にしても、三国に原則的な相違があったわけではなかった。相違は程度の差に過ぎなかったのである。さらにグロムイコの協調姿勢もあって、会議は論点を残しつつも順調に進み、9月28日に「国際安全保障組織創設に関する提言」をまとめて終了した¹²⁾。このときも、グロムイコのアメリカ世論を重視する姿勢は変わらなかった。彼は新聞の論調を丹念に追い、10月3日、8日、17日と3回にわたって報告した¹³⁾。彼はそこで、「提言」に対して全体としてはアメリカ世論が好意的であること、一部に拒否権問題でのソ連の立場を現実的であると評価する動きが見られること、「提言」の反対派は反ソ的であるばかりか、反ローズベルト、孤立主義という方向をもつことを伝えていた¹⁴⁾。

この時期のグロムイコの活動は国連創設問題に限られていたわけではなく、アメリカ専門家としても重要な報告を送っていた。彼は10月には、チャーチルとスターリンによるバルカン問題の取り決めについて、ホプキンスが強い批判を述べたと伝えていた。大統領は英ソ間の協議に「若干の不満」と「彼ぬきの協議で重要な政治的決定が為されたのではないかという懸念」を抱いているというのが、グロムイコの観測であった¹⁵⁾。この電報からみて、グロムイコは、バルカンをめぐるスターリンとチャーチルの取り引きを知らなかったのかもしれない。

翌月には、彼は再びハリマンと会って、「ポーランド問題は最も複雑な政治問題の一つである」という対談相手の見解をコメントなしで伝えていた¹⁶⁾。グロムイコがダンバートン・オークスで忙殺されている間に、ワルシャワ峰起をめぐる連合国間の関係が緊張する事態が生じており、確かに彼がここでスターリンに、アメリカ世論に対する配慮を求めたとしても効果は薄かったかもしれない。

いずれにしても、この時期のグロムイコはたんなる傍観者ではなかった。このことは、10月と11月に彼が送った電報が示していた。彼は二度にわたって財務長官モーゲンソーのドイツ懲罰案と親ソ的発言を伝えていたのであるが、その際結びに「モーゲンソー案には、国務省もハル自身も冷たく対応しているという印象が残る」と付言していた¹⁷⁾。グロムイコは、東欧の問題をめぐる米ソ関係が緊張をはらんでいると警告もしなかったが、しかし、政治的影響力を考慮せず親ソ的発言を伝えていたわけでもなかったのである。

翌年早々にグロムイコは再びモスクワに戻った¹⁸⁾。来たるべきヤルタ会議に備えてである。今回はヴィシンスキーやマイスキーのみならず、ゲーセフとグロムイコも会談に参加することになった¹⁹⁾。リトビノフはまだ次官として留まっていたが、しかしその出番はなかった。既に若い世代がドイツ処理問題や国連創設問題で戦後処理に実質的に関わっていたことを考えれば、それは当然であったが、しかし同時に、彼の戦後処理構想が上層部と異なっていた可能性を示唆するものでもあった^{19-a)}。

2月に開かれたヤルタ会談において、グロムイコもゲーセフも、それぞれがこれまで担当してきた問題に関わる技術的点を除けば、目につく活動はしなかった。もちろん会談は歴史的意味をもつものと認識されていたが、彼ら若い世代にはそれ以上に、東欧を解放し、

ベルリンに向かう赤軍を背景に、ソ連がどのように振舞うものなのか、スターリンを通じて実地に学ぶ機会として貴重であったように思われる。ゲーセフとグロムイコは、会談の間、スターリンが滞在したユスポフ宮殿の傍屋に居住し、その悠然とした挙措を見守っていたのである²⁰⁾。

グロムイコの目にはスターリンは、会議において相手の言うことを即座に理解し、その注意力と記憶力は「電子計算機」のように何物も逃さない、「非凡な資質をもった人物」と映っていた²¹⁾。そのスターリンは、英米両国に対して、ドイツからの巨額の賠償取り立てを細部にわたって具体化するように迫り、ポーランド問題では、それがソ連の安全保障に直接関わるからイギリス以上に利害関心があると主張し、対日参戦の代償に千島列島とサハリンを領有するのを認めるよう要求したのである²²⁾。こうした要求は、三国間の結束を強めるものではなかったが、しかしスターリンは、戦時中に培われた友情によってよりも、自国の強大化によってその安全を確保しようとしたのである。それが彼の安全保障コンプレックスに発していたのか、あるいは、資本主義と社会主義の基本的対立というイデオロギー的認識に依っていたのかは、この事実だけで結論できることではなかった²³⁾。

いずれにしても、グロムイコもまた、こうした交渉姿勢が連合国の不信感を決定的に増大させるとは考えなかったようである。彼は回想録で、ローズベルトが対日参戦の代償を認める書簡を送ってきたとき、これでアメリカは日露戦争のときの「名誉回復」をしたと発言し、スターリンの賛同を得たと記している²⁴⁾。グロムイコの論理は、アメリカは日露戦争で悪いほうを援けてしまったので、今その誤りを正しているということであろう。このときも、それから40年余後も、外交はときに自制によって他国の信頼をかちとるものだとする理解はグロムイコには無縁であったのである。

ヤルタ会談は、国際連合の創設問題にも触れ、ウクライナとベロロシヤ両国の加入を確認し、紛争当事国の拒否権については制裁行動の発令される場合に限って認めることになった²⁵⁾。これにより重要な意見の相違はなくなり、4月からのサンフランシスコ会議で規約作成に着手することになった。

会談の終了後、ワシントンに戻ったグロムイコは再びアメリカ情勢を伝えていた。3月1日と6日に彼は世論の動向を報告していた。とりわけ1日のものは、有力議員、高級紙、大衆紙の見解を詳細に分析するものであった²⁶⁾。それから40日ほど後に新大統領トルーマンの行方を占って書いた電報も、グロムイコの成熟したアメリカ理解を示すものであった。後者では彼は、短期的には対外政策に変化はないが、しかし長期的展望に立つと、取り巻きの「様々な孤立主義的反ソ・グループが彼〔トルーマン〕にどの程度影響を与えるのか、当面言明するのは困難である」と書いていた²⁷⁾。文面は、トルーマンによって「同盟国の協力を損なう行為」がとられるのではないかというグロムイコの危惧を表していた。彼にとって、米ソ協力が大事でなかった時はこれまで一度もなかったのである。

サンフランシスコ会議でのソ連側代表は、外相モロトフであった。当初ソ連側はグロムイコを代表とし、ソボレフ、ノヴィコフ第二西欧部長(イギリス担当)、ツェラプキン、ヴァシリエフ中將、ロディオノフよりなる代表団を通知していた²⁸⁾のであるが、ローズベ

ルトの要請とトルーマンの大統領就任という事態を受けて考えを改めたのである。しかしモロトフは、5月8日にドイツの無条件降伏の報が入ると、その日のうちに帰国の途について³⁰⁾。この時までには会議は全体討議が終わって、委員会方式による詰めの段階に入っていた。この時期に、グロムイコは会議の終わる日まで、ソ連側の代表を務めたのである。ソ連側の一参加者が回想するごとく、「彼は会議とその多数の機関の全活動の脈をとっていたに違いなかった。」それほど彼は、会議の間議論された多数の細々とした論点に関与していたのである。

6月26日に2カ月に及ぶ会議はようやく終わった。この日演壇に上ったグロムイコは、会議は様々な困難と相違を克服しなければならなかったと述べた³²⁾。困難は多くの場合、大国とではなく小国との関係で生じた。回想録でも彼はそのことを次のように書いている。

「ソ連の代表は会議の間中、西側の代表は、少数の例外を除き、別の概念で考える別の世界の間人ではないかと感じていた。その際我々の最も厚かましい反対者となったのは、西欧の大国の代表よりはむしろ、それらに依存する国々の代表であった³³⁾。」

かかる見解は先に引用した演説の中にも表れていた。彼はそこで平和の維持について語ったのであるが、しかし、すべての国の自制と協調を訴えることはなかった。彼はただ、平和のためには「国際組織の構成国の行動の一致と協調、とりわけ、世界の最も強力な軍事的な大国の行動の一致と協調が不可欠である」と述べたのである³⁴⁾。ここに端的に表れた軍事的な大国中心の国際政治観は、彼が駐米大使として戦時の間に見てきた状況と切り離すことはできなかった。回想録で認める通り、それは西側小国の考え方と相容れないものであった。そればかりでなく、彼の見解は、帝国主義国による弱小国の抑圧を現代の国際政治の常態と説く思想からも遙かに離れたものであった。しかし戦時の間に外交官として成熟してきたグロムイコには、他のいかなる国際政治観も現実的なものとは見えなかったのである。

結びにかえて

戦争が終わり本格的な冷戦が始まるまでの過渡期に、グロムイコは国際連合の開会に向けて多忙な日々を過ごしていた。8月にはロンドンに飛び、国連本部の設置場所を決める会議に出席した¹⁾。ここで同時に開かれていた外相会議では、既にモロトフとイギリスの外相ベヴァンが衝突する事態が生じていた²⁾。これまでに外務人民委員部の中堅幹部として地歩を固めてきたグロムイコの将来も、国際政治の動向に大きく依存するものであった。

46年2月、スターリンは最高会議の選挙のために演説した。しかし、彼はそこでもまだソ連がどのように新たな状況に対応するつもりであるのか明言しなかった。ただ祖国をあらゆる偶発事から守るために、三次にわたる五カ年計画が必要であると述べただけであった³⁾。グロムイコは、この演説がなされた時ちょうどロンドンでの第一回国連総会に出席していた。彼は新聞等で演説を知り、そこに幽かな孤立主義を感じとっていたかもしれない。少なくともグロムイコにとっては、その数日前になされたモロトフの演説の方が、理解できるものをもってはいたはずである。そこには次のように一節が含まれていた。

「[戦争という]偉大な試練を通り抜けて、ソ連は国際生活のきわめて重要な要素としてさらに前進した。ソ連は今や世界の最も権威ある国家の一つである。(拍手)今や国際関係の重要な問題は、ソ連の参加なしに、あるいは我が母国の声を聞くことなしに、解決することは不可能である⁴⁾。」

しかし、アメリカを知るグロムイコは、かかる認識がまだ実質を伴っていないことに気づいていたはずである。軍事面でアメリカに追いつくだけでさえ、まだ20年余りの国力の傾注を要したのである。慎重なグロムイコはその時まで、このモロトフの言葉を篋底に沈めておくはずである。

— 注 —

1. 課題設定

- 1) A. A. Громыко, *Во имя торжества ленинской внешней политики*, М., 1978, с. 194.
(以下、この著作は *Во имя* と略す。)
- 2) 公刊された演説集に拠るだけでも、グロムイコは1971年4月3日、74年6月10日、76年9月論文、79年2月26日、81年1月論文、83年4月論文で、この公式を繰り返している。順に *Там же*, с. 224, 346, 452., A. A. Громыко, *Ленинским курсом мира*, М., 1984, с. 60, 226, 514.
(以下、この著作は *Ленинским курсом* と略す。)
- 3) *Во имя*, с. 53, 145. それぞれ、1966年4月2日、69年7月10日のものである。
- 4) *Там же*, с. 52-53, 101-102. それぞれ66年4月2日、67年12月29日付である。
- 5) この点では亡命ソ連外交官アルカジー・シェフチェンコが同旨のことを明言している。
Arkady N. Shevchenko, *Breaking with Moscow*, Ballantine Books, ed., New York, 1985, p. 197. 邦訳【モスクワとの訣別】(読売新聞社、1985年)、197ページ。
- 6) Richard F. Staar, *USSR Foreign Policy after Detente*, Stanford, California, 1985, p. 48. ここでスターは「外相 [グロムイコ] はフルシチョフとブレジネフの影の中で生き残った後、最終的に病めるアンドロポフの下で対外政策の主要な発言者として現れ、チェルネンコの下でもこの役割を果し続けた。彼の公的な発言……はアメリカに対する根深い敵意を示している」とその解釈を示している。
- 7) A. A. Гречко, 'Руководящая роль КПСС в строительстве армии развитого социалистического общества,' *Вопросы истории КПСС*, 1974, No.5, с. 39.
- 8) М. А. Суслов, *Марксизм - ленинизм и современная эпоха*, том 2, М., 1982, с. 168.

2. 外務人民委員部に入るまで

a 生い立ちと抜擢

- 1) グロムイコの回想は短い英文と和文のもの他に、二巻本のロシア語版がある。本文で回想録と呼ぶのは三番目のものである。順に、A. A. Gromyko, *Autobiographical Introduction, Only for Peace*, Oxford, 1979, pp. 1-16. グロムイコ「自伝的序文」『ソ連邦の外交政策』第二部、(カトー・シンクタンク、1984年)、5～52ページ。A. A. Громыко, *Памятное*, кн. 1-2, М., 1988. なお、各々で数字等の食い違いがみられる。

- 2) *Депутаты верховного совета, М., 1984, с.117.*
- 3) *Памятное, кн. 1, с. 11.*
- 4) 彼には姉がいたが早世していた。17年と22年に生れた二人の弟のうち後者は第二次大戦中に亡くなった。*Там же, кн. 1, с. 19, 47.* もう一人戦死した弟がいるが、生年は不明である。
- 5) *Там же, кн. 1, с. 11.*
- 6) *Там же, кн. 2, с. 401-402.*
- 7) *Там же, кн. 1, с. 32-33.*
- 8) *Там же, кн. 2, с. 404.*
- 9) *Там же, кн. 2, с. 405.*
- 10) *Там же, кн. 1, с. 31.*
- 11) *Там же, кн. 1, с. 28-30.*
- 12) *Там же, кн. 1, с. 15.*
- 13) Roger Pethybridge, *The Social Prelude to Stalinism*, Rep. ed., London, 1977, pp. 160-161.
- 14) *Памятное, кн. 1, с. 15-16.*
- 15) *Там же, кн. 1, с. 18-19.*
- 16) *Там же, кн. 1, с. 43.*
- 17) *Там же, кн. 1, с. 20.*
- 18) *Там же, кн. 1, с. 45.*
- 19) *Там же, кн. 1, с. 46.* ただし、英文と邦文の回想では1930年に入党したとある。A. A. Gromyko, *op. cit.*, p. 4., グロムイコ, 前掲書, 12ページ。
- 20) *Памятное, кн. 1, с. 46.*
- 21) *Там же, кн. 1, с. 18.*
- 22) *Там же, кн. 1, с. 46-47.*
- 23) *Дипломатический словарь, 4-ое изд., т. 1, М., 1984, с. 275.*
- 24) *Памятное, кн. 1, с. 46.*
- 25) *Там же, кн. 1, с. 48-49.*
- 26) *Там же, кн. 1, с. 49-50.*

b 知的形成

- 1) この事情については、ロイ・メドヴェーデフ, 『共産主義とは何か』, 上巻, (三一書房, 1973年), 221~223ページ。技術専門家についてのすぐれた分析として Kendall E. Bailes, *Technology and Society under Lenin and Stalin*, Princeton, New Jersey, 1978, とくに pp. 192-200.
- 2) *ВСЭ, 3-ье изд., т. 13, М., 1973, с. 282.*
- 3) *Там же, т. 4, М., 1971, с. 17.*
- 4) *Памятное, кн. 1, с. 51.*
- 5) *Там же, кн. 2, с. 288.*
- 6) *Там же, кн. 1, с. 51-53.*
- 7) *Там же, кн. 1, с. 60.*
- 8) *Дипломатический словарь, 4-ое изд., М., 1984, с. 275.*

- 9) *Ленинским курсом*, с. 664-686, 687-700.
- 10) *Там же*, с. 666-679.
- 10-а) *Там же*, с. 688-693.
- 11) *Там же*, с. 698-700.
- 12) たとえば、1938年1月5日付【ブラウダ】に載った国際論評欄では、小国を犠牲にして「侵略国」を宥和するイギリスとそれに従うフランスへの中途半端な批判がみられる。
- 13) *Памятное*, кн. 1, с. 16-17.
- 14) *Там же*, кн. 1, с. 35-40.
- 15) *Там же*, кн. 1, с. 56-60.
- 16) *Там же*, кн. 1, с. 63.
- 17) 1983年に刊行された伝記でカラハンは1937年9月20日に亡くなったことが確認された。ともに В. В. Соколов, *На боевых постах дипломатического фронта*, М., 1983, с. 185-186.
- 18) *Известия*, 27 окт, 1963.
- 19) 拙稿「外務人民委員リトヴィノフ 研究・回想・証言」, 和田春樹編『ロシア史の新しい世界』, (山川出版社, 1986年), 307ページ。
- 20) *FRUS*, Soviet Union, 1933-1939, p. 382, Henderson to the Secretary of State, June 13, 1937.

3. 入部から訪米へ

а 1939年の外務人民委員部

- 1) *Памятное*, кн. 1, с. 67.
- 2) *Там же*, кн. 1, с. 75.
- 3) *Там же*, кн. 1, с. 83.
- 4) Charles E. Bohlen, *Witness to History*, London, 1973, p. 65.
- 5) 前掲拙稿, 304-308ページ。
- 6) Aleksei Roshchin, 'Soviet Prewar Diplomacy,' *International Affairs*, 1987, No. 12, p. 120.
- 7) Д. Краминов, *В орбите войны, 1939-1945*, 2-ое изд., М., 1986, с. 79.
- 8) *Дипломатический словарь*, 4-ое изд., т. 1, М., 1984, с. 140.
- 9) *Там же*, т. 3, М., 1986, с. 28.
- 10) А. Е. Богомолов, 'На дипломатическом посту в годы войны,' *Международная жизнь*, 1961, No.6, с. 100-101.
- 11) V. Semyonov, 'Diplomacy Born of October Revolution,' *International Affairs*, 1987, No. 11, p. 100.
- 12) このグループにはこの他、後の外務次官コズイリョフ、後の駐印大使 К. В. Новиков等が入る。経歴はそれぞれ *Дипломатический словарь*, 4-ое изд., т. 2, с. 53. *Там же*, с. 286. 参照。
- 13) Roshchin, *op. cit*, p. 113. なお同校は1939年からは外務省附属高等外交学校と呼ばれ、1974年に外交アカデミーとして改組された。*Дипломатический словарь*, 4-ое изд., т. 1, с. 307.
- 14) *Дипломатический словарь*, 1-ое изд., т. 1, М., 1948, ст. 527.
- 15) *Там же*, 1-ое изд., т. 2, М., 1950, ст. 95.

- 16) *Дипломатический словарь*, 4-ое изд. т. 3, М., 1986, с. 542.
- 17) 前掲拙稿, 307ページ。
- 18) このグループに入る者として, 後の外務次官プーシキン等がいる。*Дипломатический словарь*, 1-ое изд., т. 2, ст. 478.
- 19) デカノゾフについては, Е. Гнедин, *Катастрофа и второе рождение*, Амстердам, 1977, с. 108, 131. ロゾフスキーについては *Советская историческая энциклопедия* т. 8, М., 1968, ст. 760-761.
- 20) *Дипломатический словарь*, 1-ое изд., т. 1, ст. 433-434.
- 21) Н. Г. Пальгунов, *Тридцать лет*, М. 1964, с. 228.
- 22) このグループではその他に後の次官コルネイチウク, 中国大使パニユシキン等がいる。*Дипломатический словарь*, 4-ое, т. 3, с. 618. *Там же*, т. 2, с. 338.
- 23) W. Hayter, *Russia and the World*, London, 1970, p. 32.
- 24) Семуонов, *op. cit.*, p. 100.

б 実務的外交官

- 1) *Памятное*, кн. 1, с. 75.
- 2) *Там же*, кн.1, с. 76.
- 3) Богомолов, *Указ. статья*, с. 101, В. И. Чуйков, *Миссия в Китае*, М., 1981, с. 55-58.
ここで, Богдамоловもチュイコフもスターリンに接見された様子を述べている。
- 4) *Памятное*, кн. 1, с. 77.
- 5) 彼については, スターリンの私的書記局の一員であったとする説がある。А. Авторханов, *Происхождение партократии*, т. 2, Frankfurt/M., 1973, с. 414
- 6) *Памятное*, кн. 1, с. 78-81.
- 7) J. L. Gaddis, *Russia, the Soviet Union and the United States*, New York, 1978, pp. 138-141.
- 8) *Памятное*, кн. 1, с. 85-87.
- 9) А. Ю. Борисов, *СССР и США, Союзники в годы войны, 1941-1945*, М., 1983, с. 32.
- 10) *Там же*, с. 38.
- 11) *Советско-американские отношения во время Великой Отечественной войны 1941-1945*, (以下 *Док: Сов-ам* と略す) т. 1, М., 1984. с. 43 (22 июня 1941).
- 12) *Там же*, с. 45.
- 13) И. М. Майский, *Воспоминания советского дипломата*, 2-ое изд., М., 1987, с. 565-567.
及び以下の電報をみよ。*Советско-английские отношения во время Великой Отечественной войны 1941-1945*, (以下 *Док: Сов-анг* と略す) т. 1, М., 1983, с. 52-53 (28 июня 1941).
- 14) *Док: Сов-ам*, т. 1, с. 58-63 (10 июля 1941), с. 64-66 (13 июня 1941), с. 77-79 (29 июля 1941).
- 15) *Там же*, с. 132-133 (10 окт. 1941).
- 16) *Там же*, с. 133.
- 17) *Там же*.

- 18) W. A. Harriman and Elie Abel, *Special Envoy to Churchill and Stalin*, New York, 1975, p. 103.
- 19) *Док: Сов-ам*, с. 139 (8 ноя. 1941).
- 20) *Памятное*, кн. 1, с. 92.
- 21) *Док: Сов-ам*, т. 1, с. 141 (9 ноя. 1941).

с АМЕРИКА СПЕЦИАЛИСТЫ

- 1) Э. С. Шейнис, 'Моему дальнейшему потомству,' *Юность*, 1966, No.7, с. 89.
- 2) *Док: Сов-ам*, т. 1, с. 159.
- 3) *Там же*, с. 155-157.
- 4) *Там же*, с. 158, (23 марта 1942).
- 5) *Памятное*, кн. 2, с. 321-322.
- 6) 30年代のソ連外交にリトヴィノフとモロトフの路線上の対立があったとする説については、拙稿「ソ連外交の『転換』, 1930-1935」 溪内謙・荒田洋編『スターリン時代の国家と社会』（木鐸社, 1984年）所収を参照されたい。
- 7) *Памятное*, кн. 2, с. 322.
- 8) たとえば、彼は回想録でトリノヴィノフが革命後自らをイギリス労働者階級の下に信認された大使と称し、レーニンの不興をかったと書いているが、そのような事実は知られていない。
Там же, кн. 2, с. 301. この間の事情は以下をみよ。С. Зарницкий, Л. Трофимова, *Так начинался Наркоминдел*, М., 1984, с. 177-180.
- 9) モロトフについては *Памятное*, кн. 2, с. 324-326. スターリンについては、たとえば *Там же*, кн. 1, с. 228. をみよ。
- 10) *Док: Сов-ам*, с. 224-230. この長文の報告書はグロムイコ自身、もしくは取りまきが特別の理由から働きかけたことにより公表されたものと思われる。他に参事官レベルの報告書が収録されていないからである。
- 11) *FRUS*, 1942, vol. III, p. 577.
- 12) *Док: Сов-анг*, т. 1, с. 237-240 (26 мая 1942).
- 13) *Док: Сов-ам*, т. 1, с. 198-202 (11 июня 1942).
- 14) *Там же*, с. 229.
- 15) *Там же*, с. 226.
- 16) *Там же*, с. 229.
- 17) *Там же*, с. 230.

4 戦中から戦後へ

а 大國の駐米大使

- 1) 構成員はヴァルガ, ヴィシンスキー, スーリッツ, ウマンスキーその他であった。 *История КПСС*, кн. 1, М., 1970, с. 550.
- 2) Great Britain, Foreign Office, Russia, Correspondence, 371/36991, N605/315/G, Eden to C. Kerr, March 10, 1943. (以下この資料は FO と略記し番号, 日付を記す。)
- 3) Vojtech Mastny, *Russia's Road to the Cold War*, New York, 1979, p. 97.
- 4) *Док: Сов-анг*, с. 350-351 (10 марта 1943).

- 5) Док: Сов-ам, с. 299-301 (29 марта 1943)., с. 301-302 (31 марта 1943).
- 6) Майский, Указ. соч. с. 734.
- 7) Переписка председателя совета министров СССР с президентами США и премьер-министрами Великобритании во время Великой Отечественной войны 1941-1945, т. 2, М., 1957, с. 66-68, т. 1, с. 130-131. (以下 Переписка と略。)
- 8) Mastny, *op. cit.*, p. 79, В. Я. Сиполс, *На пути к великой победе. Советская дипломатия в 1941-1945*, М., 1985, с. 187.
- 9) Известия, 27 мая 1943.
- 10) Takayuki Ito, 'The Genesis of the Cold War, Confrontation over Poland, 1941-44,' *The Origins of the Cold War in Asia*, ed. by Yonosuke Nagai, Akira Iriye, Tokyo, 1977, p. 166.
- 11) Переписка, т. 1, с. 137.
- 12) Док: Сов-ам, т. 1, с. 340 (2 июля 1943)., с. 349 (13 июля 1943).
- 13) Там же, т. 1, с. 356.
- 14) Там же, т. 1, с. 351 (19 июля 1943).
- 15) Там же, т. 1, с. 339 (2 июля 1945), с. 351-352 (19 июля 1943).
- 16) Переписка, т. 1, с. 143-147.
- 17) Там же, т. 1, с. 149.
- 18) Там же, с. 148-149.
- 19) Док: Сов-анг, с. 412-413 (30 июля 1943).
- 20) Там же, с. 427-439 (26 авг. 1943).
- 21) Там же, с. 444-445 (3 сент. 1943).
- 22) История КПСС, кн. 1, с. 549-550.
- 23) 構成はヴォロシーロフ, Мейсกีの他に, 元外務次官ポチョムキン, 軍事アカデミー校長, 元帥シャポシニコフ, 中將イグナチェフ, 少將ガラクチオノフ, その他であった。
История КПСС, кн. 1, с. 549, М. И. Петров, *В дни войны и мира*, М., 1982, с. 137-141.
- 24) *История КПСС*, кн. 1, с. 549, タルレについて E. B. Тарле, *соч. т. 1*, М., 1957, с. v-xxxvii. コミンテルン解散時までのマヌイルスキーの活動については『コミンテルンの歴史』下巻, 村田陽一訳 (大月書店, 1973年), 200~202ページ。
- 25) ヴォロシーロフの委員会のその後の活動については, М. И. Петров, *Указ. соч.*, с. 141-144.
- 26) *Московская конференция министров иностранных дел СССР, США и Великобритании*, М., 1984, с. 173-174.
- 27) Там же, с. 180.
- 28) Там же, с. 322-323.
- 29) Там же, с. 321-322.
- 30) Там же, с. 338-339; Martin Kitchen, *British Policy towards the Soviet Union during the Second World War*, London, 1986, pp. 166-167.
- 31) I.V. Stalin *Сочинения*, т. 2 (XV), Stanford, California, 1967, pp. 152-171.
- 32) Известия, 22 авг. 1943. この時点でのグルムイコ像として, 以下におけるアイザー・バー

リンの評参照。FO371/36925, N5392/22/38, Elkin to Wilson, Sep. 15, 1943.

- 33) *Дипломатический словарь*, 4-ое изд., т. 3, с. 44.
- 34) 回想の中にはこれを「大失策」とするものもある。Б. Ф. Подцеров, ‘Тегеран - Потсдам,’ *Дипломатический вестник*, 1983, с. 240.
- 35) *The Memoirs of Cordell Hull*, vol. 2, New York, 1948, pp. 1253–1254.
- 36) *Док: Сов-ам*, т. 1, с. 373-377.
- 37) *Там же*, т. 1, с. 435, с. 441-442.
- 38) *Там же*, с. 468-470.
- 39) *Тегеранская конференция руководителей трех союзных держав—СССР, США и Великобритании*, М., 1984, с. 150.
- 40) M. Kitchen, *op. cit.*, p. 178.
- 41) *Док: Сов-ам*, т. 2, М., 1984, с. 43-44 (21 фев. 1944).
- 42) *Переписка*, т. 2, с. 118-120.
- 43) *Док: Сов-ам*, т. 2, с. 103-104.
- 44) *Там же*, с. 113-114 (15 мая 1944).

б 国連の創設者

- 1) *Док: Сов-ам*, т. 2, с. 120-122.
- 2) В. М. Бережков, *Годы дипломатической службы*, М., 1972, с. 229.
- 3) *Конференция представителей СССР, США и Великобритании в Думбартон-Оксе*, М., 1984, с. 95.
- 4) Бережков, *Указ. соч.* с. 248-249.
- 5) 諮問委の役割を重視するものとして, R. M. Slusser, ‘Soviet Policy and the Division of Germany,’ S. J. Linz ed. *The Impact of World War II on the Soviet Union*, Totowa, N. J., 1985. またソ連側の研究として А. А. Рощин, *Послевоенное урегулирование в Европе*, М., 1984, с. 51-90.
- 6) *Конференция в Думбартон-Оксе*, с. 95-100.
- 7) *История КПСС*, кн. 1, с. 559.
- 8) *FRUS, 1944*, vol. I, p. 741.
- 9) ステйтиニニアスはこの点を繰り返し報告している。 *Ibid*, pp. 748–750, 769.
- 10) *Конференция в Думбартон-Оксе*, с. 133-136 (28 авг. 1944), с. 138-141 (29 авг. 1944).
- 11) *Там же*, с. 147-150 (31 авг. 1944).
- 12) *Там же*, с. 25, с. 213-226.
- 13) *Док: Сов-ам*, с. 221-223 (3 окт. 1944), с. 231-232 (8 окт. 1944), с. 238-240 (17 окт. 1944).
- 14) *Там же*, с. 221, 231-232, 240.
- 15) *Там же*, с. 233-238 (13 окт. 1944).
- 16) *Там же*, с. 257 (10 ноя. 1944).
- 17) *Там же*, с. 225-229, (6 окт. 1944), с. 259-263 (13 ноя, 1944), とくに с. 261.
- 18) *Памятное*, кн. 1, с. 167.

- 19) *Крымская-конференция трех союзных держав — СССР, США и Великобритании*, М., 1984, с. 246.
- 19— а) この時期にリトヴィノフは E. スノーに、英米を知らないモロトフ、ヴィシンスキー、デカノゾフが外務人民委員部を支配していると述べていた。Mastny, *op. cit.*, p. 222.
- 20) *Памятное*, кн. 1, с. 182, 187.
- 21) *Там же*, кн. 1, с. 182.
- 22) *Крымская конференция*, с. 76-77, 92, 129.
- 23) ソ連の指導部の前にあったのは「革命の祖国」の擁護か外部の革命の促進かの選択であった。
- 24) *Памятное*, кн. 1, с. 189.
- 25) *Крымская конференция*. с. 154, 256.
- 26) *Док: Сов-ам*, т. 2, с. 317-322, 324-325.
- 27) *Там же*, с. 364-366 (21 апр. 1945). 引用は с. 366
- 28) *Конференция Объединенных наций в Сан-Франциско*, М., 1984, с. 79.
- 29) *FRUS, 1945*, vol. I, p. 156, 24 March 1945.
- 30) А. А. Роцин, 'Сан-Франциско, 1945,' *Дипломатический вестник*, 1986, М., 1987, с. 354.
- 31) *Там же*, с. 356.
- 32) *Конференция в Сан-Франциско*, с. 257.
- 33) *Памятное*, кн. 1, с. 242.
- 34) *Конференция в Сан-Франциско*, с. 257.

結びにかえて

- 1) A. Roshchin, 'The United Nations : Coming into Being,' *International Affairs*, 1986, No. 9, p. 124.
- 2) *Памятное*, кн. 1, с. 323.
- 3) I. V. Stalin, *Сочинения*, т. 3 (XV), т.3 (XVI), Stanford, California, 1967, p. 20.
- 4) В. М. Молотов, *Вопросы внешней политики*, М., 1948, с. 24-25.

A. A. Gromyko in the Formative Years, 1909-1945

Shinji YOKOTE

Though more than three years have passed since Gromyko was relieved of his post as Minister of Foreign affairs, research on his role and influence in the formulation of Soviet foreign policy during his tenure remains among the most urgent objectives for students of Soviet foreign policy. In the report to the assembly of the Japanese Society for the Study of Russian and Soviet History in November, 1985, I pointed out that judging from Gromyko's public pronouncements, he was shaping foreign policy from the latter half of the 1960s, when he strongly cautioned isolationism and in 1970 pronounced his favorite words for the first time that no important problem in the world could be settled without Soviet participation. This is the time when the Soviet Union opened the way to detente. So Gromyko was not only a chief claimant of Soviet globalism, but also an architect of detente.

In this essay the point is how his diplomatic concepts of this kind and his attitude towards the United States were formed by the end of the Second World War. In the second chapter dealing with the period before his entry into the People's Commissariat for Foreign Affairs, the meanings of the revolution for Gromyko are examined. He seemed to accept it not only because he was born into the poor semi-peasant family, but also because the revolution gave him the increased chances for upward social mobility. He was promoted to be a senior scientific associate because of his diligence and the loyal activities as a communist as well as the continual purges in the 1930s.

In the third chapter the process of the making of a Soviet diplomat from 1939 to 1942 is examined. After entering the People's Commissariat for Foreign Affairs, he was surrounded by men who were also recruited recently and had little experiences of diplomacy. These newmen seemed to regard diplomacy as the one closely connected with war. At first Gromyko was appointed head of the American section and then he went to the United States. Judging from his dispatches in 1941, he was not a stubborn dogmatist as was expected from his nickname "Mr. Nyet". He highly appreciated Stettinius because the latter was practical, a man of business. His report on the second front and the preparation for the war in the United States, written in August 1942, indicates that by this time he had become a keen specialist in the domestic politics of the United States. But the report also shows that he did not know much about the basic international relations. Gromyko wrote in his memoir that he could not understand the reasons for the quarrel between Molotov and Litvinov which came into the open in this period on the responsibilities of Great Britain, France and the Soviet Union for the outbreak of the Second World War. This episode also suggests that until that time Gromyko had never paid attention to the international relations in Europe before the war.

In the last chapter his activities from 1943 to 1945 are examined. On 22 August 1943 *Izvestia* announced he was appointed Ambassador to the United States. It was the day when Stalin asserted that from now on the Soviet Union should be consulted before Churchill and Roosevelt made any decisions about the postwar arrangements. In this period Gromyko wrote much about American public opinion. Though he seemed to be apprehensive of the developments of the Polish issue in the latter half of 1943, he did not bring the seriousness to Stalin's notice directly. He only communicated Harriman's warnings about this problem without comment. Stalin did not think that the newly appointed ambassadors to the United States and Great Britain should participate in the Teheran Conference. But at the Yalta Conference Gromyko and Gusev were included in the delegation, where Gromyko was impressed by Stalin's imposing attitude. He seemed to be content with the fact that the Soviet Union was treated as an equal partner in this conference. When H. Truman became the President, Gromyko made an accurate prospect and was afraid that Truman would do harm the partnership in the future. From the time he became a diplomat, he had thought it imperative to maintain good relations with the USA. This attitude was confirmed in the process of the making of the United Nations, with which Gromyko was charged from the start. As Stettinius admitted, he was very cooperative in the Dumbarton Oaks Conference, where three great powers were the participants, but in the San Francisco Conference he was more irritated with the smaller nations' attitude. He made a speech in the final session of the Conference that the peace could be maintained chiefly by the cooperation of the militarily great powers. By this time he had made his own view of the world politics, where the supremacy of the militarily great powers and the partnership with the United States had been firmly rooted.